

<古代キリスト教から中世、そして宗教改革。後期>

オリエンテーション

1. ゲルマン民族とキリスト教
2. キリスト教修道制
3. 中世キリスト教世界のダイナミズム
4. キリストと文化——スコラ的文化総合
5. 自然神学の諸問題
6. 研究発表（角元）
7. 研究発表（金）
8. 研究発表（長岡）
9. 研究発表（山本）
10. イスラームと12世紀ルネサンス
11. フィオーレのヨアキムと歴史神学
12. 宗教改革と近代世界

<前回>フィオーレのヨアキムと歴史神学

1. キリスト教的理念と現実→スコラ的文化総合
 - ・自然、自然神学
 - ・歴史、歴史神学→「歴史と終末論」という問題設定
2. フィオーレのヨアキム(Joachim of Fiore) 1130頃-1202
 イタリアの神学者、神秘思想家。南イタリアのカラブリア地方のフィオーレに修道院を開く。独特の三位一体論に基づいた歴史神学を展開し、フランシスコ会を始め、中世以降の千年王国論に大きな影響を与えた。
 - (1) キリスト教終末論、黙示的終末論
3. 終末論（モルトマン『神の到来』）
 永遠の生（個人的終末論）／神の国（歴史的終末論）／新しい天・新しい地（宇宙的終末論）／栄光（神的終末論）
 - (2) 古代キリスト教の終末論——アウグスティヌス
4. アウグスティヌスの歴史神学・終末論：『神の国』
 黙示的終末論からの離脱、聖書の比喩的解釈、「教会は現在においてもキリストの御国」（158）
 - (3) フィオーレのヨアキム
5. 異端的な民衆運動と新しいタイプの修道院運動（托鉢修道会）
6. ヨアキムの聖書解釈学
7. 聖書解釈から歴史理論
 三位一体論：内在的 → 経綸的・歴史的
 - ・神が歴史を支配する
 - ・聖書がそれを語っている
8. ヨアキムの歴史解釈
 - ・父の時代／子の時代／聖霊の時代
 - ・三つの時代の相互内在 → 歴史の弁証法
 - ・未来としての聖霊の時代
9. 黙示的終末論の再興、千年王国論のインパクト
 西欧歴史哲学への影響

12. 宗教改革と近代世界

1. 宗教改革の思想内容（三大スローガン）

宗教改革の思想内容については、改革者によって幅があり（例えば、聖餐論争）、簡単な要約は困難であるが、その共通項を宗教改革の三大スローガンと言うべきものに集約することは可能であろう。

「信仰のみ」（信仰義認論）、「聖書のみ」、「万人司祭説」

大切なことは、これら三つのスローガンが、それぞれ内的に関連し合っている点であり、ばらばらに理解すべきではない。

2. 人間は何によって救われるのか？

・行為義認

人間は善行によって救われる。義人は救われる。何が善行であるかの内容は宗教において様々であるが（宗教儀礼に参加すること、隣人愛を実践すること、毎日祈り聖書を読むこと、献金を捧げることなどなど）、ほとんどの宗教において、行為義認に類した考えは確認可能である。

・問題は、人は救いに十分なほどの善行を実行できるか、あるいは救いを実感できるのかという点である。ルターは修道院で苦行を実践するが、ついに救いを実感できず、精神的に追い詰められる中で、善行による救いについて根本的な懐疑に至る。贖宥状への疑問はこの文脈から出されたものである。

贖宥（いわゆる免罪符）の論理：天国／煉獄／地獄、聖人・教会・功德

・ルターは、最終的に、人間の救いは心からキリストの贖罪を信じることによるのみ可能になるとの結論に到達する。これが、「信仰のみ」というスローガンで意味される信仰義認論である。このような罪と救いの理解は、新約聖書のパウロに遡り、アウグスティヌスの思想系譜に立つものである。

cf. 法然や親鸞の思想との比較。

・信仰義認論は、罪や恩寵についての実体論物的理解から、信仰者と神との関係論（罪や恩寵の精神性・内面性）への転換といえる。信じる心の純粹さという個人の人格性が問われることになる。

・もはや、救いは教会制度において媒介されるのではなく、神と個人との関わり合いにおいて成立することになり、またこの救いのあり方は、聖職者でも一般信徒でも変わらないことになる。ここに、「万人司祭」説が帰結する。人間は救いに関しては、神の前に平等である。これは、イエスの宗教運動における徹底的な平等主義理論の具体化と解することも可能である。

・「信仰のみ」は救いが自己の信仰的決断の事柄であること、つまり自己決定の問題であることを意味する。そして、自己決定は情報公開が前提にされねばならない（宗教改革の精神はきわめて近代的である！）。この救いに関する知識の情報公開に対応するのが、「聖書のみ」のスローガンに他ならない。救いの知識は、権威ある他者から伝達されるのではなく、自分で聖書を読むことによってもたらされる。

3. 理念と現実の緊張

三つのスローガンによって示された宗教改革の精神は、「理念」であって、ここに、キリスト教史において広範に確認可能な理念と現実のずれを指摘しなければならない。たとえば、聖職者と一般信徒との平等性の理念は、宗教改革の伝統に立つ教会においても、必ずしも十分に実現されていない現実がある。階層的秩序は存続している。それは、信仰の自己決定と聖書の情報公開に関しても同様である。

4. ドイツ農民戦争の前史：14世紀以来農民戦争は頻発

反封建的反教権的運動

S.Ashina

5. ミュンツァー：ルターの宗教改革への共感と後のルター批判
ドイツ農民戦争(1524.6～1525.11)、テューリンゲン蜂起、
『シュヴァーベン農民の12箇条』
6. 黙示的終末論の伝統
霊的体験（スピリチュアリズム）：「選ばれた者たち」、「霊的人々」、内なる聖書、
熱狂主義、禁欲的
終末意識：神意による大改革、アンチキリスト
民衆運動：伝統的な教会批判、平民主義、積極的な社会変革（農奴制の廃止、祖
税負担の緩和）
7. 再洗礼派へ
セクト、厳格主義
8. マルクス主義による再評価

<第一ヨハネ>

2:18 子供たちよ、終わりの時が来ています。反キリストが来ると、あなたがたがかねて聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。これによって、終わりの時が来ていると分かります。19 彼らはわたしたちから去って行きましたが、もともと仲間ではなかったのです。仲間なら、わたしたちのもとにとどまっていたでしょう。しかし去って行き、だれもわたしたちの仲間ではないことが明らかになりました。20 しかし、あなたがたは聖なる方から油を注がれているので、皆、真理を知っています。21 わたしがあなたがたに書いているのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知り、また、すべて偽りは真理から生じないことを知っているからです。22 偽り者とは、イエスがメシアであることを否定する者でなくて、だれでありましょう。御父と御子を認めない者、これこそ反キリストです。

(2) 宗教改革と近代西洋世界

9. 近代的な自律性や人格性（人権）といった理念の成立基盤
宗教改革の精神 → 神の前における → 平等自立した個人と自由・平等(理念)
西欧的な政治・経済・知のシステムとプロテスタンティズムの関係
近代議会制民主主義（リンゼイ・ターゼ）
近代資本主義・市場経済（ウェーバー・ターゼ）
近代科学（マートン・ターゼ）
10. 宗教改革と近代との逆説的關係：ウェーバー・ターゼの場合
近代キリスト教における新しい職業倫理・労働観と資本主義の精神
両者の意図せざる逆説的歴史的な関係
11. ウェーバー・ターゼ（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫）
プロテスタントの職業観 → カルヴィニズムの禁欲的エートス
→ 資本主義の精神 → 資本主義の経済システム
12. ルターのドイツ語訳聖書
クレーシス（永遠の救いへの召し＝宗教的生活）とディアターケー（割り当てられた労働）→ Beruf: 世俗的労働＝神によって与えられた使命
聖と俗の階層性の否定（万人祭司）、職業に貴賤なし、まじめさの意味がある。
だから、人間は働くべきなのである。
13. カルヴィニズム：神の選びにふさわしい生活＝禁欲的エートス → 生活の合理化
14. 資本主義の精神：勤勉、節約、正直、規律といった徳目によって構成された生活態度

資本主義経済の成立期にその担い手となった新興産業資本家はピューリタンであった（17-18世紀のイギリス・アメリカ）。

正当な労働に対する正当な報酬としての富は神からの恵みである、公正な市場経済は神の意志を実現するのにふさわしい。

市場と隣人愛、他者の必要のために生産し流通させる。

15. 近代的な世俗性への二重の関係性

18世紀以降の動向は次のようにまとめられる。

- ・近代性への適合 → 世俗主義の台頭と譲歩
合理的な宗教思想（理神論やユニテリアン）
- ・近代的世俗性に対する批判運動（敬虔主義、メソジスト、ペンテコステ運動、さらにファンダメンタリズム）

16. 文化は宗教の表現形式であり、宗教は文化の内実である（ティリッヒ）。

↓

西欧近代の国民文学は、キリスト教との密接な関わりにおいて論じ得る。宗教は文化の母体である。

17. 近代の基本原則としての自律性・自由。

近代文化（特に、啓蒙主義的近代）は宗教的基盤からの解放を目指した。

↓

西欧近代の国民文学は、宗教的基盤からの分離において、それ自体として論じ得る。一度、成立したシステムは自動的に展開し始める。

<参考文献>

1. ルター 『キリスト者の自由・聖書への序言』岩波文庫。
『ルターのテーブルトーク』三交社。
2. A. E. マクグラス『宗教改革の思想』教文館。
3. 金子晴勇『宗教改革の精神』中公新書、『ルターの宗教思想』日本基督教団出版局。
4. 今井晋『ルター』（人類の知的遺産）講談社。
5. 金子晴勇・江口再起編『ルターを学ぶ人のために』世界思想社。
6. 久米あつみ『カルヴァン』（人類の知的遺産）講談社。
7. 渡辺信夫『カルヴァンの『キリスト教綱要』を読む』新教出版社。
書評的紹介：<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub14h1.pdf>
8. 木塚隆志『トーマス・ミュンツァーと黙示録的終末観』未来社。
9. 芦名定道・小原克博『キリスト教と現代 終末思想の歴史的展開』世界思想社。
10. 『宗教改革著作集7 ミュンツァー・カールシュタット・農民戦争』教文館。
11. 梅津順一『ヴェーバーとピューリタニズム 神と富の間』新教出版社。